

かぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

第 90 号

平成 9 年 3 月 25 日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 医学部附属実験実習機器センター 千葉 伸一)

「旭川冬まつり」にて

| | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 第19期生を送るにあたって……………清水 哲也… 2 | 研究室紹介…医学部附属実験実習機器センター… 9 |
| 第19期生の諸君に感謝します…………奥野 晃正… 3 | 平成8年度1年のあゆみ……………10~11 |
| 旭川医科大学第19回卒業生名簿…………… 4 | 学内ニュース |
| 図書館への道……………菊地 慶介… 4 | スキー教室が留学生を交えて実施される…………12 |
| 卒業を前に思うこと……………北村 展子… 5 | 入院患者さんとクリスマスコンサート…………12 |
| 医師としての第一歩を踏み出すにあたって………… | 「新歓合宿」のお知らせ……………12 |
| 丸山 直紀… 5 | 20歳以上の学生の国民年金への加入について…12 |
| 退官にあたって……………宮岸 勉… 6 | 平成9年度前期分授業料免除及び延納・分納について…13 |
| 退官にあたって……………米増 祐吉… 7 | 平成9年度日本育英会奨学生の募集について…13 |
| クラブ今昔 | 学生教育研究災害傷害保険の加入について…13 |
| 柔道部……………阪本 一剛… 8 | 学生団体の設立・継続届について……………14 |
| プラスアンサンプル沿革……………齊藤 亜呼… 8 | 教官の異動……………14 |
| 講師紹介…………… 9 | 窓 外……………李 康弘…14 |



第19期生を送るにあたって

学長 清水 哲也

皆さん、学士學位記取得おめでとう。

6年間一貫教育を受けられ、今、學位記を手にした皆さん、また、この間、慈愛に満ちた眼差しで見守ってこられた父兄の皆様のお気持ちに思いを馳せる時、私もまた、まさに萬感、胸に迫るものがあります。

この想いは、全力を尽くして今日まで教育に当たってこられた全教官に共通した感慨でもあります。

私どもが、あえて卒業式という言葉を使わない理由は、今日という日は事の終わりではなく、これから皆さんが直面する「医学の道」の厳しさを思う時、「卒業」ではなくして、「医療人」としての第一歩に当たるからであります。

医学、医療をめぐる環境要件は、まことに険しく厳しいものがあります。

まず、医師供給過剰の問題があります。医師が極度に不足して、一県一医大構想に基づいて、わが旭川医科大学も昭和48年度に、道民の期待を一身に受け、いわば衆望を荷っての登場でありましたが、それから20年余を経た今日では、10年後には15,000人の医師過剰、30年後には26,000人が過剰という時代を迎えるに至っております。

つまり端的に申し上げますと、医師といえども、他の職業人と同じように、激しい「競争社会」に突入したことになります。

このような、極めて厳しい社会事象の中では、まさに一瞬の油断、些細な齟齬というものが、医師としての社会的生命を、まさに一瞬にして失ってしまう局面が、いたるところにあります。

それ故にこそ、医師ほど生涯にわたる、いわゆる「生涯学習」が強く求められている職業は他にないのです。

医学や医療の対象は、人命でありますから、当然といえば当然でありましょう。

「21世紀を目指しての医学ならびに医療懇談会」では、その「第一次報告」として、21世紀の国民の命と健康を守る医療人の育成を目指してと題し、期待される医師像として、生涯を通して最新の知識・

技術を学習し、多様な情報を自ら組み合わせ、未知の課題を解決していく積極的な姿勢、医学・医療の全般にわたる広い視野と高い見識、人間性豊で暖かい気持ちに満ちあふれ、生命に対する深い畏敬の念を持って患者や家族との対話を行い、その心を理解し、患者の立場に立つこと、自然科学としての医学を学び取るだけではなく、医学を支える社会科学などの周辺科学に対する知識と深い教養を身につけること、さらには地域医療に関心を寄せ、健康の保持、疾病の予防から社会復帰に至る、いわゆる包括医療全般への自覚、医師としての社会的責任を自負し、社会の健全な発展に対しての積極的な貢献、さらには医師は自らの能力の限界を自覚し、困難な課題に直面した際には、適当な医療機関への相談、転医などのグループ診療への整合性に富む対応、医療に従事する多岐にわたる職種の医療人と適切に役割分担し、優れたリーダーシップを発揮することなどをあげております。

「医の原点」、「医のこころ」とは、人の「いたみ」をわが「いたみ」ととられることに他なりません。

病に苦しむ方々の「悩める心」を、「苦しむ身体」を、皆さんの豊かな感性と暖かい手のひらの「ぬくもり」で、病苦にさいなまれている人達の「こころ」と「からだ」をしっかりと受けとめることであります。

昨年4月から本学に「看護学科」が新設され、本年4月からは6階建の「看護学科棟」の大規模工事が開始されるはこびとなりました。かくてわが大学は、医師の養成だけといった片足立ちの状態から、看護指導者の養成機能を有するに至りました。医学科、看護学科の両学科相まって、「包括的医療」の学習が可能なシステムが確立されつつあります。皆さんの健斗を祈って「はなむけ」の言葉といたします。



第19期生の諸君に感謝します

第6学年学年担当 奥野晃正

卒業おめでとう。私はこの二年間、学年担任を務めることができたことに感謝しています。その理由は、改めて学生と教官の関係を考えることが出来たからです。

子をもって知る親心という言葉があります。子どもを育てるうちに自然に子を想う心がめばえることを指しています。学年担任をしたお陰で、学生と教官との間にも親子と同じような関係があると気づきました。学生諸君にとっては迷惑だったかもしれませんが、私にとっては嬉しいことでした。二年前、学年担任とはどんなものかよく判らないままに引き受けました。最初の一年は奨学金の推薦状を書く、交通事故・長期欠席・休学などの相談を受ける、試験の成績をまとめるなどで終わりました。様子が少しずつ判るようになった頃から、学生諸君のことが妙に心配になり、口うるさいことを言うようになりました。怪我や病気をしないで欲しい、全員無事に卒業して欲しい、国家試験も突破して欲しいと願う想いが強くなったことに吾ながら不思議な気がします。学年担任を引き受けるまでは、卒業から医師免許獲得にいたる過程は学生自身の責任と考えていました。理屈の上ではその通りですが、個人的な感情はそうはいかないことがよく判りました。今頃になって気がつくのは一寸遅すぎると反省しています。

さて、卒業すると今度は各々目的の方向に歩き出すこととなります。学生時代の真面目と一生懸命だけでは通用しない世界に足を踏み入れることとなります。診療、研究、教育のどの分野に進むにしても、ながしかの結果を出すことを要求されます。身近な例を挙げれば、患者の診療に当たっては正しい診断、適切な治療が必要であり、治療効果を上げることが要求されるのです。その過程が満足できるもの

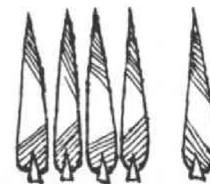
か否かについては、先輩・指導者の助けを借りつつも自分で判定しなければなりません。残念ですが、われわれはしばしば誤りを犯すことを認めざるをえません。正しい思考・行動を正しいと判定し、誤りを誤りと認め確実に修正する努力を重ねるところに進歩があります。

疾患の治療に満足できないときは、診断治療が適切であったか否かの検討が必要です。逆に、疾患の治療に満足できる結果が得られても、必ずしも診断や治療が正しかったとは限りません。患者の驚異的な回復力が幸いして良い結果をえることは決して稀ではないからです。したがって、結果の如何にかかわらず常に自分の思考と行動の過程を再検討する努力を重ねなければなりません。このことは診療に限らず、研究、教育についても同じことが言えます。

私は学生諸君との対話の中で繰り返し「真面目と一生懸命を売り物にしないで欲しい」と言ってきました。自己の思考と行動の過程を自己評価することこそ大切であり、単純にエネルギーをつぎ込むことで満足しないで欲しいと考えているからです。

一教官として私の考えと行動が適切であったか否かの判定については、今後諸君のあげる成果を参考に自己評価することにします。このようなことを考えるきっかけを与えてくれた諸君に感謝することがお祝いの言葉になるものと信じます。

(小児科学講座 教授)



図書館への道

第19期卒業生 菊地 慶介



いきなり「原稿を書け」とのお達しがあった。私のように、大学に残らない人間なら、形式抜きで好きな事を書ける。もし、その点を狙っての人選なら、な

かなか目の付けどころが良い。

さて、唐突ではあるが、私は図書館の主として生活してきた。特に、図書館特別利用カードというアイテムを入手して以来、私はまずここに居る（現在も図書館にて執筆中）。今、欧州のどこぞに居られるF氏も、図書館にて暮らすという伝説を創られたが、その点、私も負けてはいない。図書館滞在時間は、本学開設以来、私がトップである。何故、これ程まで図書館に居続けるのかというと、色々な人間が集まってきて楽しいからだ。特に、夜。これが重要。夜の図書館には、灯に蛾が集まるが如く、ハラハラと人が集まる。しかも、その顔触れたるや全然

バラバラ。何となく図書館に来てしまう人は、既に『図書館組』である。講義・実習・部活という派閥性がない辺り、実に意義深い。ここでは、下ネタからマニアな学術論争（特にT氏と筆者）に至るまで、活発な情報交換がなされる。そうすることで、一種独特の連帯感がつくられるのだ。

今でこそ、図書館はこんなに賑やかだが、私が利用し始めた頃は、人が少なく静かな空間だった。本心を言えば、その静かな世界で本をバラバラめくっているのが好きで、図書館に浸っていたわけだが、最近はずも周りに人がいて、そういう雰囲気ではなくなった。だが、それはそれで、また良い。寧ろ、今は、その賑やかさに安心を感じる。我ながら、自分の心境の変化に驚いている。思えば、私の大学生活は、万事、図書館と同じだった。一人になるつもりが、いつの間にか人の中の一だが、そんな生活も、満更まんごら、悪くはないか…。今は、そう思える。

卒業すると、ここの図書館とはお別れだ。感傷に浸るつもりはないが、これから先も、[〃]図書館的、ライフスタイルは変えないつもりでいる。

卒業を前に思うこと

第19期卒業生 北村 展子



旭川医科大学での大学生活の6年間はあっという間に過ぎ、もう少し続いて欲しいと思うくらい、本当に楽しく充実した日々を送ることが出来ました。

入学当初は、他大学との交流がほとんどなく閉鎖された環境であることを知って、暗い気持ちになったこともありました。しかし、たった600人の学生しかいないといっても、6年も居れば、先輩・後輩・沢山のひとと知り合うことになりました。この大学で得たものは、こうした人達との繋がりです。同級生はもちろん先輩・後輩、大勢のひとと喜びを共有したり、励まされたり、助けられたりしてきました。現在、卒業し医師として働くことに様々な不安を感じていますが、先輩の頑張られている姿を拝見し、今後同輩後輩もそれぞれの場所で活躍してゆくのだろう事を思えば、何とかやっていけそうな気がしてい

ます。

旭川の自然に恵まれた生活環境も得がたいものの1つだったと思います。冬の寒さがきびしい土地ではありますが、スキー部員としてその雪質の素晴らしさを楽しみました。短い夏には緑があちこちに溢れ表現し難い生命の充実感に感動した事も多々ありました。

旭川医大に物足りないものを感じて辞めていってしまう人もいましたが、欠けているものばかり意識してしまうのではなく、他に無い旭川の素晴らしい部分に目を向ければ十二分に満足のいく学生生活を送れる土地だと、私は自信を持って言うことができます。

愛着のあるこの土地を去るのは心寂しく、残念なことです。しかし、そう感じるくらい素晴らしい日々を送ることの出来た旭川医大、そして旭川を誇りに思えることが、またうれしい事です。

今後、大学に入学してくる誰もが、他では体験出来ない、ここにしかない充実した生活を送って欲しいと考えています。

医師としての第一歩を踏み出すにあたって

第19期卒業生 丸山 直紀



大学生活を振り返ってみて色々な事がありましたが、その中でも特に印象に残っている事といえば、それは臨床実習においてある医師に「君は患者さんがこの疾患のために、どのように不自由な生活をしていて、苦しみ悩んでいるのかを考えたことはあったのか」と指摘された事です。実を言うと私は自分の経験からも以前から、人の心と体の関係には注目して

いて精神状態は時に肉体に大きく影響するものであり、この事は常に頭に入れておかなければならないと思ってはいましたが、実際には医学的知識に基づく器質的病変にしか目がいかず、何に苦悩し、どうしたらそれが和らぎ安心してもらえるのだろうという精神的状態への配慮というものに欠けていたという事に気づきました。この事は自分に対して強く反省の念を促したと同時に、では具体的にどうすれば

人々のために本当に力になってあげられる医師になれるのであろうかと考えさせるものとなりました。それから卒試があり国試に向けて勉強している現在忘れかけていたのですが、この機会に考えてみました。諸先生方からみると何ともお粗末なものであるかと思いますが、まず医師として正確に診断できるように豊富な医学的知識の獲得を目指すと共に、周囲のひとと調和して明るく優しい雰囲気を出し、人の気持ちを常に考えることができるようにならなくてはいけないと思います。しかし考えてみると自分は自分だけの狭い世界を作り、包容力のある人間性を築きあげようと努力してこなかったのが残念でなりません。けれども自分にはまだまだこれからの長い人生があるので、今後は人間性を研ぎ、一日一日前進するように心がけて、この先待ち構えている試練も逆に感謝の気持ちをもって受け止めて、頑張っていきたいと思います。そうすれば自分もいつか多くの人のために役立つ医師になれるような気がするのです。



退官にあたって

精神医学講座 教授 宮 岸 勉

北大医学部を卒業したのが昭和35年のことであるから、インターン実地修練を終えて母校の精神科に入局を許されてから早いもので36年が過ぎてしまった。昭和51年に本学に赴任して新しい精神医学講座がスタートした時は、森田昭之助教授のほかに3名の教官と1名の女性事務官の計5名という小さな世帯であり、与えられた狭い部屋に雑居する生活であった。

思えば、茶道具や電気ポットなどを自宅から持ち寄り、やがて始まる系統講義の準備に終日専念することができた生活が意外に楽しかった記憶として残っている。それから21年間、多数の先輩の方々に支えられ、年々入局してくる若い仲間達と共に精神医学をじっくりと学ぶことが出来た幸せは、私の65年間の人生における最高の思い出である。そして、許されるならば、生まれ変わりの人生でもこの旭川医大精神科で勉強したいと思う。

さて、私は、臨床面でも研究領域でも初老期・老年期の精神障害に関心をもち続けて今日に至ったが、その研究成果を問われると恥じ入るばかりである。それにしても、私の学位論文のテーマであった神経細胞内リポフスチンの成因、超微形態、分解または排出機序、加齢と共に蓄積されるリポフスチンがヒトや動物の知的機能にいかなる影響を与えているのか等々、不明の点が何と多いのであろうか。それだけに、リポフスチン研究も含めて初老期・老年期の精神障害（特に痴呆）の神経病理学的基盤についての興味は尽きるところを知らない。もちろん、臨床痴呆学の発達にも期待すべきところはきわめて大きい。

わが国は、いうまでもなく世界一の超高齢社会であり、昨年9月の総務庁の資料によれば、65歳以上の高齢者人口が全人口の15.1%、実数にして1,900万人に達した。よく知られているように、65歳以上の人口の約5%が軽重さまざまな程度の痴呆患者であるから、その治療対策の確立は焦眉の急であるが、薬物療法を取り上げてみても、厳密に言えば確実に有効な「抗痴呆薬」は、現在も世界各国で研究開発中の段階である。幸いにしてテトラヒドロアミノアクリジン（タクリン）がアメリカ、フランス、英国

などで認可され、その後、第二の同効薬が脚光をあびているが、その評価が定まるのはまだ先のことであろう。しかも、わが国ではまだこれらの抗痴呆薬は使用することを許されていない。

痴呆を早期に発見するための診断基準も確立されているとはいえないが、そもそも生体老化のメカニズムが不明ゆえ、やむを得ないことである。にもかかわらず、今後の痴呆対策として最も力点をおくべきことは「痴呆予防薬」の開発であると私は思う。たとえば、アルツハイマー型痴呆患者の脳に激しい変性所見が見いだされるかを長年観察してきた者の1人として、痴呆に対する現在の薬物療法には残念ながらおのずから限界があるように思うのである。脳循環・代謝改善薬を用いたとしても、アセチルコリン補充療法を試みたとしても、現況としてはその効果を期待し過ぎてはならない。

このような観点から、 α -トコフェロール、特殊な合成化合物である OPC-14117、あるいはロイペプチンなどを用いて、脳の実験的老化に関する一連の動物実験を行ってきた。そして、これからも医局の研究グループがこのテーマに関心を寄せて精力的に取り組んでほしいと願っている。

もう一つ、かねてから心に留めていながら、さまざまな理由のために実現できなかった計画がある。それは高齢者（特に痴呆患者）の専門病棟を設けたいということであった。近い将来死を迎えようとしている独居高齢者、寝たきりの痴呆高齢者、慢性かつ難治性の疾病で長期入院を余儀なくされている高齢者等々の最終的ケアは、末期の癌患者を対象とするホスピス・ケアと同列に考える訳にはいかないからである。

ここまで書き進めてきて、私自身の生来の力不足を改めて気づかされる羽目になった。そして、医局の優秀な若いスタッフが「老年精神医学」全般の臨床的・基礎的研究の進捗を目指して頑張ってもらいたいと心から願うのである。

教職員の皆様のご健勝とご活躍、そして本学のますますの発展を祈念して筆をおかせていただく。心からの謝意を添えて。



退官にあたって

脳神経外科学講座 教授 米増 祐吉

昭和52年12月旭川に赴任して19年余り平成9年3月31日で定年退官ということになります。思えば永い年月のようでもあり夢のように過ぎた年月でもあるようです。

旭川医科大学脳神経外科は平成9年4月1日で成人式を迎えることになります。北の国の真っ白い雪の上にどのようにでも描くことが出来たはずであります。果たして旭川医科大学脳神経外科はどのように出来上がったのでしょうか。成るようにしか成らなかったと言う思いとまだ何とか成ったのではという思いとが複雑に重なり合います。

南の九州からなじみは整形外科の竹光教授のみという脳神経外科としてはなじみのない土地でどのような教室がつくれるか大きな不安を抱えて赴任したことでした。寒さに関してはアメリカで Wisconsin の-40度を経験していましたので余り心配はしていませんでしたが日本での寒冷地の状況に慣れない心配はありました。

教室作りには九州大学の北村勝俊教授（現名誉教授）と北海道大学脳神経外科都留美都雄教授（故人名誉教授）の手厚いご援助で5人の **founding staff** を得ました。思えば都留先生のご厚意なくして旭川医大脳神経外科はありえなかったともいえます。北大出身の先生方で整形外科の島教授という九州大学出身の先生の教えを受けられた先生が私が九州大学出身ということで親しみを示して戴きましたが地域医療にとけ込むのは容易とはいえませんでした。

昭和53年4月から第一外科（9階東病棟）に間借り状態で診療を開始し、5月29日に第1例の手術を行いました。昭和53年7月10日、10階東病棟の完成に伴い放射線科と混合の脳神経外科病棟が開始されました。それから現在までひたすら患者さんのため最良の医療を目指してきましたが記憶に残るものは辛い思い出ばかりです。本当に辛いのは患者さんの方であることは医師の宿命といえましょう。

昭和54年4月には待望の本学卒業生第1期生4人を迎え、以後本学卒業生46人、他学出身6人、総計52人が入局して、内29人が専門医取得、学位取得が18人というのが教育研究の成果です。臨床研修のためには適当な施設が必要ですが、当初は個人病院のご厚意により何とか体制作りが出来ました。

新設医大として関連施設の確保は絶対条件ですが

ご支援戴いた病院のお陰でここまで成長できたといえます。教室の厚みが増えるとともに国公立の病院のご理解もえられるようになりましたが、いつも教室の体制維持と関連施設での研修の人員の配置に悩む状態は続いています。診療に追われる状態から少し余裕を持って臨床研究の成果を期待出来るようにしたいと思ってきましたがなかなか期待に添えませんでした。

この様な状態でも地方会、北日本学会、全国研究学会も主催し、北海道の特徴を生かして、てんかん、脳虚血の冬期セミナー等で旭川医科大学脳神経外科の存在を示してきました。てんかんの実験的研究、てんかんの外科手術、脳虚血の基礎的実験、頭蓋底外科、脳腫瘍特に下垂体腫瘍、小児脳神経外科など旭川医科大学脳神経外科の得意領域といえましょう。特にてんかんの実験と外科手術は国際的にも日本有数と認められ、世界的に高名な研究者の講演も旭川で数回行われています。また小児脳神経外科学研究会で小児のてんかん外科をテーマにとりあげたことは遅れている日本の現状に大いに刺激になりました。てんかんの外科は今や世界的にも脳神経外科の主要課題の一つに帰り咲き、北海道では旭川医科大学でしか行っていません。これからは日本全国各地域にてんかんセンターを作っていくことも考えねばならないと思っていますが、小児科、精神科、生理学に専門家を擁している旭川医科大学の特徴として育てていけば大学の生き残りを支える柱になると確信しております。脳神経外科がこの方向へのびていく夢を旭川医科大学の皆様には預けたいと思います。

旭川に来てから冬学会等で本州へ出かけると必ず冬は大変でしょう、寒いでしょうと声をかけられますが、いつも北海道の人は寒く暮らしていません、我慢すると命に関わりますから、本州のほうが寒いのを我慢して暮らしてきますと答えてきました。雪で車も動かないではないかとも言われますが、雪は冬を明るくします。北海道に慣れましたかと聞かれると“雪か嫌だな”という気分になるまでは慣れたといえないのではと答えてきました。

雪はねがいい運動と思える間は“北の暮らしが大好きです”未だ当分は旭川にいるつもりですので変わらぬご厚誼のほどお願いいたします。

ク ラ ブ 今 昔

柔 道 部

医学科第3学年 阪本 一剛

旭川医大柔道部は、2期生の宮田先生、小池先生、石川先生を中心に結成されました。当時は武道場もなく、様々なご苦労をなさったそうです。畳3枚で始められ体育館のすみで練習をなさっていたそうですが、畳の下はコンクリートで受け身のたびに非常に痛い思いをなさっていたそうです。チームワークはよく、人数は少なかったそうですがランニングなどの体力トレーニング、そして教育大まで自転車で出稽古にいられたそうです。また、今に至るまで教育大の片岡先生にはご指導を受けています。

その後、畳の数も増えていき、今のトレーニング室で練習をするようになり、教育大の方々に来てもらうようになったそうです。

そして、その関係で今に至るまで続いている教育大、旭大、工専との四校戦、北大、札医との三校戦、そ

して清水での春学宿も当時の先生方が始められたそうです。

その後、今も続いている夏合宿も行われるようになり、土別の鷺見先生の道場に行きご指導を受け、厳しい練習ながらも精神も技も鍛えられています。しかし当時はもっと厳しかったらしく、今でも厳しいと感じている我々には想像もつきません。

現在、部員は6名で、週3回の練習を行っており、人数が少ない分、密な練習を行うように心がけており、筋力トレーニングも組みこんでいます。また練習が単調にならないように町道場である高畑道場や花咲道場へ行き、高畑先生、藤田先生の指導を受けています。

今年も有望な部員が入りました。顧問である大木先生のもとで東医体の上位入賞はもちろん、柔道を通じて精神を鍛え、より一層練習に励んでいきたいと思っておりますのでどうぞこれからもよろしくお願い致します。

ブラスアンサンブル沿革

医学科第3学年 斉藤 亜呼

ブラスアンサンブルは現在吹奏楽団として活動しており、約30名の部員が在籍しています。創部された当時は文字通り金管バンドとして活動をしていましたが、年々部員が増加し、木管楽器奏者が加入したこともあって、次第にビッグバンドから吹奏楽へとその演奏形態を変化させてきました。

現在行っている演奏会は年に4回ありますが、そのうちの多くは初期の部員であった先生方の御努力でできあがってきたものであると伺っています。中でも市内の他大学と合同でのジョイント・コンサートは様々な理由から中止されていましたが、昨年3年ぶりに再開されました。大人数で演奏する機会が少なく、医学部以外の学生との交流もほとんどない私たちには非常に有意義な演奏会となりました。また、この他にも病院のロビーでのコンサートや他の音楽系サークルと合同での「音楽の夕べ」などを行

っています。

現在の私たちの活動は以上のようになっていますが、これらの活動を行うにあたり、学生時代にブラスの一員として御活躍なさっていた先生方に様々な面で御指導・御援助を頂いています。2年に1度開かれる「OB演奏会」では、OBの先生方と私たちが合同で演奏させて頂いています。毎回、大曲を1曲ずつ演奏していますが、音楽を愛する心はいつまでも変わらないのだと実感する演奏会でもあります。

さて、私たちの現在の悩みは部員不足とそれによる楽器編成の偏り、それに楽器の老朽化です。部員不足は無理な勧誘を行わないせいもありますが、楽器の不足は部員の“個人持ち楽器”に頼っている面があります。しかし、このような状況でも、部員ひとりひとりが音楽が好きで集ってきたわけで、音楽の楽しさをよく知っています。私たちはこの「音楽の楽しさ」をこれからもより多くの人々に演奏を通じて伝えていきたいと考えています。

講 師 紹 介



ふじ もと かず ひろ
氏 名 藤 本 一 弘
所 属 集中治療部
出身大学 旭川医科大学
ひ と 言

集中治療部は新しい部であり創設期としての不安はありますが、麻酔科蘇生科時代に学んできた急性呼吸循環管理の知識、技術を活用して病院全体の利益のために努力する所存でおりますので、どうぞよろしくお願ひ致します。



あか ま やす ゆき
氏 名 赤 間 保 之
所 属 麻酔科蘇生科
出身大学 旭川医科大学
ひ と 言

現在は主に手術室にて臨床麻酔にたずさわっております。年々多様化する手術術式、複雑化してゆく患者監視モニター、手術患者の高齢化など私たちに与えられた課題は大きくなってゆきます。まだまだ未熟な点も多く、諸先生方、関係諸機関の皆様にはご迷惑をおかけすることも多いと存じますが、ご理解ご協力をお願いいたします。



はやし ひろ あき
氏 名 林 博 章
所 属 産科婦人科
出身大学 日本医科大学
ひ と 言

旭川医大大学院に1979年入学以来、早くも約18年目を迎えようとしています。二度目の講師昇任ですが、前回よりも少し落ちついて日常の業務を行えそうです。婦人科腫瘍を中心に、一層尽力致しますので、よろしくお願ひ致します。



たか しお てつ や
氏 名 高 塩 哲 也
所 属 放射線科
出身大学 旭川医科大学
ひ と 言

第一内科を経て放射線科へ入局、このたび本職を拝命しました。諸先生からの御指導、御鞭撻のほどよろしくおねがいたします。

研 究 室 紹 介

■ 医学部附属実験実習機器センター ■

技術主任 宮川 清志

実験実習機器センターは昭和56年4月1日に省令施設として、前身の中央研究部から学内の教育、実習、研究のための共同利用施設として誕生して、15年目を迎えた。センター長は歴代4人目の松嶋少二教授(解剖学第二講座)で、専任教官の田中助教、宮川(技術主任)、日下部、鈴木、阿久津、千葉の5技官と菅井事務補助員、武井技術補助員を加えた9名の人員である。

専任教官の田中助教はセンター長を補佐し円滑な管理・運営に務めている。一方では、学部、大学院学生への医用生体工学の講義及び実習の他、NMR医学の分野では学内研究者との積極的な共同研究も進め、また海外でも講演など、国際交流も行っている。宮川、日下部、鈴木、阿久津、千葉の5技官は機器類の日常の整備・管理によって共同利用施設としての円滑な機器運営を行っている。また、多様化する研究内容に対応出来るように、各技官は研修会や、センター長会議の技官専門分科会での技術成果の発表、また、生理学技術研究会などへの参加により

技術の習得に努めている。菅井事務補助員は、受付・事務全般、武井技術補助員は、アミノ酸・化学部門を担当している。

ここで主な機器を紹介する。1階には電子顕微鏡、超遠心機、工作室、電子スピン共鳴装置、質量分析計、核磁気共鳴装置、2階にはアミノ酸分析計、自記分光光度計、高速液体クロマトグラフィー、血液ガス分析装置、原子吸光度計、共焦点レーザー走査蛍光顕微鏡、3階には計算機、画像解析装置、カテコールアミンアナライザー、ポリグラフ、軟X線装置、細胞解析分取装置、4階にはフォトセンターがある。

学内における共同利用研究施設としての利用者への幅広いニーズに答えられるよう、努力いたしますので、今後とも宜しくお願ひいたします。



平成8年度

1年のあゆみ

4月

5日 平成8年度医学科入学式（於 体育館）
〔新生 100名（うち女子学生 29名）〕



医学科入学式

13日 平成8年度看護学科入学試験
15～16日

医学科新生研修（於 第1～4セミナー室）

19日 医師国家試験合格発表

（本学合格者 91名、合格率89.22%）

平成8年度看護学科入学試験合格者発表

25日 平成8年度看護学科入学式（於 体育館）
〔新生 60名（うち女子学生 56名）〕



看護学科入学式

5月

23日 看護学科新生研修（於 第5セミナー室）
5月31日～6月2日

第22回医大祭

（テーマ：『失われた意志、を求めて』）



医大祭

6月

28日 博士学位記授与式（於 第2会議室）
（博士学位記被授与者 8名）

7月

11～14日

第43回北海道地区大学体育大会

当番校：帯広畜産大学

本学参加種目：陸上競技（男女）、準硬式
野球、バスケットボール（男女）、バレー
ボール（男女）、卓球（男女）、剣道（男）、
弓道（男女）、ハンドボール
成績：第3位 準硬式野球
卓球（女）

総合成績：男子16位、女子13位

7～8月

第39回東日本医科学生総合体育大会夏季
大会

主管代表校：日本大学

本学参加種目：陸上競技（男）、準硬式野
球、テニス（男女）、ソフトテニス（男女）、
卓球（男女）、バレーボール（男女）、バ
ドミントン（男女）、サッカー、バスケット
ボール（男女）、柔道、剣道、弓道、空
手道、水泳（男女）、ゴルフ（男女）、馬
術、ハンドボール、ラグビー
成績：第3位 バドミントン（男）
バドミントン（女）

第4位 弓道

卓球（女）

8月

9日 平成8年度納骨式（於 本学納骨堂）
8～10月

第30回全日本医科学生体育大会王座決定戦

主管校：金沢医科大学

成績：第4位 弓道

9月

4日 体育大会（学生主催）

競技種目：綱引き、卓球、バドミントン、
バスケットボール、サッカー



体育大会

25日 平成8年度解剖体慰霊式（於 体育館）



解剖体慰霊式

30日 博士学位記授与式（於 第2会議室）
（博士学位記被授与者 5名）

10月

1～31日

平成8年度公開講座
「酒の功罪と健康」



公開講座

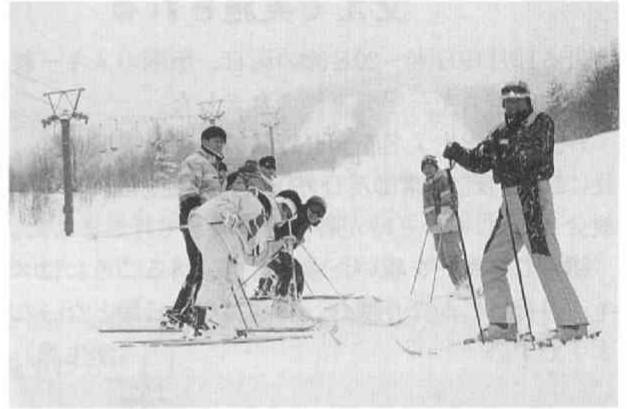
11月

5日 本学記念日

12月

19～20日

スキー教室（於 北大雪スキー場）
講師4名、厚生補導委員会委員、参加学生 19名



スキー教室

25日 博士学位記授与式（於 第2会議室）
（博士学位記被授与者 6名）

12～3月

第39回東日本医科学生総合体育大会冬季大会
主管代表校：日本大学
本学参加種目：スキー（男女）、アイスホッケー

1月

18～19日

平成9年度大学入学者選抜大学入試センター試験（本学会場 820名）

2月

13日 平成9年度大学院入学者選抜試験
25日 平成9年度第2次試験（前期日程）

3月

3日 平成9年度大学院入学者選抜試験合格者発表
6日 平成9年度第2次試験（前期日程）合格者発表
米増教授最終講義
7日 宮岸教授最終講義
12日 平成9年度第2次試験（後期日程）
21日 宮岸教授、米増教授歡送式
平成9年度第2次試験（後期日程）合格者発表
25日 平成8年度学士学位記授与式（於 体育館）
（学士学位記被授与者 96名）
博士学位記授与式（於 第2会議室）
（博士学位記被授与者 21名）

学内ニュース

スキー教室が留学生を 交えて実施される

去る12月19日(木)～20日(金)の両日、恒例のスキー教室が北大雪スキー場で実施されました。

外国人留学生7名を含む19名の学生の参加を得、昼は講習、夜には講師及び外国人留学生を囲んでの懇親会と、楽しいひと時が瞬く間に過ぎて行きました。

初めてスキーを履いた参加者も、帰るころにはスキーの扱いにかなり慣れ、有意義な2日間となったようです。(学生課)



入院患者さんと クリスマスコンサート

室内合奏団・合唱部によるクリスマスコンサートが、12月15日(日)と22日(日)それぞれ病院ロビーで行われました。

このコンサートは、日頃の練習成果を発表するとともに、入院生活を送っている患者さんにクリスマスの雰囲気味わってもらおうと、この時期毎年企画されているものです。

ロビーでは、患者さんなどたくさんの方々が、クリスマスソングなどに耳を傾けていました。

(学生課)



「新歓合宿」のお知らせ 新入生歓迎実行委員会

毎年大好評の「新入生歓迎合宿」を、今年も4月12、13日に行うことになりました。

予定されている内容は次のとおりです。まず学内では、各クラブの紹介、学内めぐりなどがあります。特に、クラブの紹介は見ものです。うちの学生のほとんどがどこかのクラブに所属していて、各クラブが、強烈な印象を与えようと試行錯誤しています。その後、神居観光ホテルに移動して、グループごとの先輩方との交流会、自己紹介を含めたゲーム、クラブ勧誘が行われ、最後は1年生だけの時間となります。新しい友と飲み明かし、語り明かし、大学生活の最初の有意義な時間を過ごせると思います。

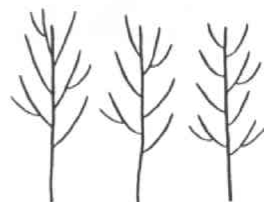
毎年、ほぼ全員が参加しているので、今年も新入生全員が楽しめるように、上級生共々、心より新入生の参加をお待ちしています。

20歳以上の学生の国民年金 への加入について

国民年金法の改正に伴い、大学に在学する学生で20歳以上の者は、平成3年4月1日から国民年金の被保険者(当然加入)として適用を受けることになりました。

従来、学生については、20歳以後在学中に障害者となった場合、国民年金に加入していない限り障害基礎年金が支給されず無年金となっていました。また、基礎年金制度は、原則として、20歳から60歳までの40年間加入することを前提に満額の老齢基礎年金を支給することとされており、平成3年4月1日からは、学生であっても20歳以上の者は全て国民年金に加入しなければなりません。

なお、国民年金への加入の手続き、保険料の納付方法及び保険料の免除等の詳細については、住民票を登録している市区町村の国民年金担当窓口へ直接問い合わせください。



平成9年度 前期分授業料免除 及び延納・分納について

平成9年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、下記基準のいずれかに該当すると思われる学生は、教務部学生課厚生係で必要書類を受け取り下記の期間内に申請して下さい。

なお、申請者については、選考の間授業料の納入を猶予します。

また、不明な点は、同係に問い合わせ願います。

記

1. 授業料免除基準

- (1) 経済的理由によって授業料の納付が困難であり、かつ、学業優秀であると認められる場合
なお、平成9年度において原級に留置されている者又は、最短修業年限を越えて在学している者は、免除の対象としない(休学の理由による者を除く。)
- (2) 授業料納期前6ヵ月以内(新生入生については、入学前1年以内)において学生の学資を主として負担している者(以下「学資負担者」という。)が死亡し、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けたことにより、授業料の納付が著しく困難であると認められる場合
- (3) (2)に準ずる場合であって、学長が相当と認める事由がある場合

2. 申請書類

- (1) 授業料免除申請書
- (2) 学資負担者が死亡した場合は死亡診断書(写)
- (3) 災害を受けた場合は罹災証明書(市区町村、警察、消防署が発行したもの。)
- (4) 市区町村発行の所得証明書(給与所得者については、平成8年分の源泉徴収票を、給与所得者以外については、平成8年分の確定申告書(一面・二面)等の写し(生計を一にする家族全員分)を、また、学資負担者が死亡した場合は、死亡前の所得証明書を併せて添付すること。)
- (5) 失業者は、民生委員又は職業安定所の証明書
- (6) 生命保険金の支払いを受けた場合は、当該保険会社の保険金支払証明書
- (7) 家族の中に就学者がいる場合は、その者(申請者本人及び義務教育の就学者は除く)の在学証明書
- (8) その他家庭事情により参考となる証明書等

3. 申請期間

- (1) 在学生……………平成9年2月20日(木)
～3月31日(月)
- (2) 平成9年度入学生…平成9年4月11日(金)
～4月21日(月)

平成9年度 日本育英会奨学生の募集について

日本育英会は、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しております。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生の募集要項を、4月上旬に公用掲示板に掲示しますので、貸与を希望する学生は、提出期限に遅れないよう所定の書類を教務部学生課厚生係に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、同係に相談してください。

学生教育研究災害傷害保険の加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中・通学中および大学の授業等、学校行事または課外活動で施設間移動中における災害事故補償のために『学生教育研究災害傷害保険』の賛助会員大学となり下記のとおり加入受付事務等を行っています。

本保険は、学生の互助共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備え、できるだけ全員の加入を勧めています。

なお、平成8年4月より通学中等傷害危険担保特約が付帯されましたので加入を希望する学生は教務部学生課厚生係に申し込んでください。

記

1. 受付期間 自平成9年4月14日(月)
至平成9年4月30日(水)
2. 受付窓口 教務部学生課厚生係
3. 保険料(通学中等傷害危険担保特約含む)

| | | |
|-----|--------|--------|
| 6年間 | 4,300円 | (900円) |
| 5年間 | 3,750円 | (800円) |
| 4年間 | 3,100円 | (650円) |
| 3年間 | 2,400円 | (500円) |
| 2年間 | 1,650円 | (350円) |
| 1年間 | 950円 | (200円) |

()は通学中等傷害危険担保特約保険料分

4. 支払い保険金の種類と金額

| 種類 | 区分 | 正課中 | 学校施設内の休憩中 学校施設内外の課外活動中 (学校施設外の課外活動中 については、大学に届出た活動に限る。) |
|---------|-------|------------------------------|--|
| | 死亡保険金 | | 1,200万円 |
| 後遺障害保険金 | | 54万円～1,800万円 | 27万円～900万円 |
| 医療保険金 | | 実治療日数4日 以上が対象 6千円～30万円 | 実治療日数14日 以上が対象 3万円～30万円 |
| 入院加算金 | | 1日につき4,000円 | 1日につき4,000円 |

| 通学中等傷害危険担保特約 | |
|--------------|---------------------------------------|
| 種類 | 区分 |
| 死亡保険金 | 通学中、大学の授業等、 学校行事または課外活動 で施設間移動中 |
| 後遺障害保険金 | 600万円 |
| 医療保険金 | 27万円～900万円 |
| 入院加算金 | 実治療日数14日 以上が対象 3万円～30万円 |
| | 1日につき4,000円 |

学生団体の設立・継続届について

平成9年度において、新しく設立しようとする学生団体、もしくは活動を継続しようとする学生団体は、4月30日(水)までに設立届または継続届を学生係に提出してください。

なお、継続届の提出がない学生団体は、解散したものととして処理しますので注意して下さい。

(学生課)

教官の異動

| | | | | |
|----|----------|-------|-----|-------|
| 辞職 | 96.12.31 | 内科学第一 | 助教授 | 山下 裕久 |
| 昇任 | 97. 2. 1 | 皮膚科学 | 助教授 | 橋本 喜夫 |
| ◇ | 97. 2. 1 | 放射線科 | 講師 | 高塩 哲也 |
| ◇ | 97. 2.16 | 整形外科学 | 教授 | 松野 丈夫 |
| ◇ | 97. 2.16 | 解剖学第一 | 教授 | 木山 博資 |

窓 外



李 康 弘

学者の純真

先日、テレビを見て、フェルマーの最終定理が証明されたことを知った。フェルマーは17世紀フランスの数学者で、彼の最終定理とは以下の如くである。

$$x^n + y^n = z^n \quad (n \geq 3)$$

を満たす自然数

解 x, y, z は存在しない。

フェルマー自身はこの定理に関し、「私は真に驚くべき証明を発見したが、その証明を書くには、この余白は狭すぎる。」という謎めいた走り書きを残したまま死んでしまった。従って、フェルマーの最終定理は実は定理ではなく、予想であった。予想の内容自体は誰にでも理解できる。ところが、多くの大数学者達が300年以上にもわたり、フェルマー予想の証明に取り組んだにもかかわらず、予想は予想のまま、定理には成らなかった。

20世紀末、この予想を真の最終定理に昇格させた人物は、ケンブリッジ大出の、痩せぎすで、冴えない風体の男だった。彼は、さるテレビ局のインタビューにおいて、証明のきっかけとなるインスピレーションを得た談になると、にわかに声をつまらせ、鼻を赤らめ、`Sorry、`と言って目頭を押さえた。私も危うくもらい泣きしそうになった。何しろ純粋に見えた。

フェルマーの最終定理が証明されても、世間には

何の影響もない。事実、証明以前に相対性理論も、量子力学も完成したし、人類は月面にすら立った。しかし、あの痩せぎすの数学者の涙に心動かされない者がいるとすれば、その人は学者には向いていない。ギリシアの哲人の例を挙げるまでもなく、学問の起点には純粋な「知」への志向があるべきだ。

近年、我々の研究分野である生命科学は、一見華々しく、学問進歩の象徴のようにも見える。年間に発表される論文の数は文字通り無数であり、他の自然科学分野に比べ、研究者数も極端に多い。だが、この状況に危惧を感じているのは私だけだろうか。ある研究グループが金と人力にものをいわせ、新しい遺伝子を単離すると、その情報は瞬く間に世界を駆けめぐる。有名無名の研究者が、ハイエナの如くこぞってその遺伝子に群がる。新しい仮説もなく、純粋な動機もなく、なかば自動的に同じ遺伝子に関する同じ研究を始める。数年も経つと、その遺伝子についてはもうやることなくるので、次の遺伝子に乗り換える。要するに、人よりも早くデータを出し、なるべく評判の高い科学雑誌に論文を載せるだけの勝負である。独創性は資金力と速さに、動機は点数稼ぎにすり替わっている。これはもう学問のバブルである。

フェルマーの最終定理を征服したあの男は、証明に7年間を費やした。その間に論文は一つも出なかったという。小学生の頃から既にフェルマーの定理を意識していたらしい。まさに純粋だ。惚れた。こんな奴が世の中に居るとすれば、俺なんか全然駄目だ。恥ずかしい。いったい自分はどうして数学者に成りたかったのか。昔は確かに汚れなき科学少年であった筈だ。その純真を今一度思い出そうとしている。

(病理学第一講座 助教授)